

元祿壬申冬十月三日、つまり元祿五年の初冬に彦根藩邸に許六を訪ねての発句。丁度ふりだししぐれをよみての挨拶句で、「なんと折よく時雨が降ってきたことよ。こんな日ばかりは若い人たちも、年老いた気持になつて、しみじみと、この初しぐれのさびしい風情を味わつてほしいものである」と詠み上げたもの。

芭蕉の句では「此秋は何で年よる雲に鳥」が有名であるが、「雲に鳥」は元祿七年の翁没年の作で、なによりら心身に衰えのあるのを感じさせているのに対し、この二年前の「人も年よれ」の句には、何やら「若い」の願望のような心が汲みとれる。

自然の恩愛に恵まれた中で、その自然に対する愛こそ日本文芸の特質であり、始まりであると言えよう。初しぐれを眺めながら、自然に向かいあう自分を確かめ、その自他を含めた感懐の中で、「人も年よれ」と詠み出すのである。年寄れ、年寄る、年聞ける、ことよつて、わび、さびを呼びこみ、中世の「あはれ」とは別種の、日常の中での「ほそみ」へ「からび」を得ようとする切なる人間愛というべきものだろう。

けふばかり人も年よれ初時雨

はせを



【芭蕉 晩年の

しどけなく道芝にやすらひて
どむみりとあふちや雨の花曇 芭蕉
芭蕉の言葉に、文字通り「俳諧は老後のたのしみ」というのがある。弟子の支考は、その著「俳諧十論」（享保四年刊）において、この言葉の真意について考へ、左のように記している。

能き時は友達おほく、よろづにあそびやすからんに、老て世の人にまじはるべきは、たゞ此俳諧のみなれば、是を虚実の媒にして、世情の人和といへる也。

末尾の部分は、これも芭蕉の言葉である「たゞ世情に和せず、人情通ぜざれば人不調。まして宜友なくてはなりがたし」（『三冊子』）を踏まえての発言であるが、聞くべき見解であらう。

今日、いやでも「老」を意識せざるを得ない年齢を迎えつつある人々にとって、俳句とかかわっているということが、日々を、充実した、楽しく素晴らしいものにしていくということは、各自、素直に納得し得るものであるまいか。

最晩年、五十一歳の芭蕉にしてからが、「しどけなさ」（老のふがいなさ）を自覚しつつも、肩の力を抜いて、「どんみり」の擬態語を、軽やかに、見事に使っておおせているのである。

復本 一郎

復本
一郎**俳境に学ぶ】**

元祿七年九月二十六日大坂での作。この秋は特に健康が優れなかった。今年の秋はどうしてこれほどに身の衰えを感じるのだろうか。高い空を仰ぐと、鳥が雲に紛れ入るのが見られるが、その頼りない様子は、旅先で病む私の心のようにだ、との意。この句を収載する『笈日記』によれば、「下の五文字寸々の腸をさかれ」た苦心の表現であったという。「雲に入る鳥」は春の季語だが、こゝは季語ではなく、文字通り雲の彼方を飛ぶ鳥であり、芭蕉の老への感懷が託されたものであった。十月十二日死去したことを重ねると、死の意識があったかもしれない。晩秋のわびしさとともに、芭蕉の深い寂寥感が表出した。芭蕉には老をあからさまに詠んだ句は少ない。しかし晩年には、若さでは捉え得なかったものを深くかつ確かに把握している。

衰老を慨嘆するのではなく、これまで見えなかったものが見えてくる、その時々之感懷を素直に表現出来たらよい、と私は思っている。老の意識をどう詠むかは、つまるところ個個人の普段の生き方に係わることである。

關森勝夫

折り紙と
「折る文化」を考える

季刊
O R U

大人のための
折り紙雑誌、創刊！

美を折る。
心を折る。
生活を折る。

古今東西折り鶴絵巻

橋本治「四千羽の蝶」

【小特集】
現代に生きる「所」心

【インダストリー】

「折る文化」

「折り」が要の江戸扇子作り

【かり紙を貼る】

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

◆ロバート・J・

◆折り図30ページ掲載

本誌は一般書店では取り扱いしておりません

ご注文はフリーダイヤル(通話料無料)
または、ハガキで直接当社までどうぞ

0120-101-862

送料は当社負担です／代金後払い(郵便振替)

A4変型判160ページ

●定価2,060円(本体2,000円)

發行 双樹舎

〒112東京都文京区小石川2-3-28 DK小石川405

老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉

蕪村

蕪村が発句に本腰を入れたのは五十を過ぎてからだから、高齢化社会の今日では六十も半ばを過ぎていた計算になろうか。それ以前の作は五十句そこそこしか残されていない。ほとんどの句が老齢期の作ということだが、芸術上の奇跡とも言えるだろう。その蕪村に直接「老い」をうたった句はあまり多くはない。これは安永三年、五十九歳の作と推定されている句。

いつも姿の見えた老鵜匠、ことしは見えぬ。どうしたのか。病気が、それとも……と余韻をひく、いい句である。「ことしは見えぬ」というような平凡な人の生きよう、静かに消えるような世からの去り方をしむじみとした共感をもって詠じているかのようだ。

蕪村は懸命に若さを保った。「老が恋」がその芸術に灯を点じもした。流行し出した富籤を買い、もし当たったら、良い絵具で注文にとられぬ絵を描き、思いきり俳諧にも遊ぼうなどと夢を見たり、好奇心のまま歳を忘れて生きようとした。そして、ときに「ことしは見えぬ」というような死を望んだりもした。死を恐れた気配はない。生・死は「コッチ」と「アッチ」。それは次第に入りまじって来ていた。

矢島 清男

草の戸に消えなで露の命かな

蕪村

粗末な草の庵にあって、露のようににはかない命だが、まだ消えてしまうこともなく、余生を過ごしている、の意。『夜半更句集』に収められている。蕪村最晩年の作と推定される。

「草」→「露」→「消」と縁語の鎖が仕込まれているが、聞き慣れた語が自然に連なっている。感懐は素直にこちらの胸にはいつてくる。作者自身もおそらく技巧とは意識していないだろう。蕪村は晩年にいたり、体の不調を感じることも多くなったが、心情は澄んでくる。表現の技法にも天成ともいえるような冴えが感じられる。

この句ははるかに『おくのほそ道』冒頭の句、

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家 芭蕉に唱和している。芭蕉は草の戸を住み捨てて、長途の旅に立ち、それから五年ほどで命を終えた。ところが自分は住みなれた草の戸に命ながらえて、なおも住み続けているというのである。蕪村の終生尊敬し続けた芭蕉だが、結局芭蕉には及ばないという諦念であろうし、我には私の道があるという達観であろう。

山下 一海

【蕪村 晩年の

俳境に学ぶ】

冬驚むかし王維が垣根かな

蕪村

蕪村は天明三年（一七八三年）十二月二十五日、六十八歳で世を去った。その当時の句である。まだ寒いのに垣根をうごかす驚がきっているようである。むかし中国の詩人王維の家廻りの垣根もこのようであったろうというので、画業を積み、俳諧に傾倒した蕪村には、中国の文人墨客が生涯の理想像であったのだろう。

芭蕉の没後における俳諧の大衆化は卑俗きわまりなく、その抵抗として「芭蕉に還れ」との声が江戸を離れた信州の加舎白雄、加賀の堀麦水らによってとり上げられ、上方の蕪村はそこにあつて最も大きな存在だったが、求道的な芭蕉とは異質だった。しかし芭蕉を尊敬していたことは「箬著てわらぢはきながら」と詞書して「芭蕉去てそのうちいまだ年くれず」と追慕していることによってもうかがえる。

蕪村は若い頃に江戸へ出て東北の旅もしているが、元来は上方の人である。華やかな脚光を浴びながら一生を終えるよりも、上方人共通の一市井人として喜びも悲しみも平常心で消化した。だが異質であっても王維や芭蕉を尊敬した。晩年に学ぶべき点であろう。

中西 錦土

NHK学園生涯学習フェスティバル 締切五月八日
「俳句のつどい」東海・北陸大会 二案内

NHK学園では「俳句のつどい」東海・北陸大会を名古屋生涯教育センターで開きます。講演は川崎展宏先生です。地元をはじめ全国の皆様のご投句、ご参加をお待ちしています。

募集 未発表近作二句（何組でも可）

選者 伊藤敬子（笹）・宇佐美魚目（墨）・金子青銅（白露）
斎藤朗笛（白桃）・高崎武義（符）・森下草城子（木）

締切 平成五年五月八日（土）当日消印有効
投句料 一組につき千六百円（入選作品集代を含む）

大会 定額小為替または現金書留
平成五年六月二十六日（土）午後一時より

特別講演 「俳句とカタルシス」 親代表・明大教授 川崎展宏

投句方法 所定用紙、または二百字詰原稿用紙を使用し、住所・氏名・性別・年齢・電話番号を書き添える。

賞 大会大賞・特別賞・特選他

会場参加 当日会場への入場を希望される方は、ご自分の宛名を書いた官製はがきを同封のこと。

投句先 〒一八六〇一 東京都国立市富士見台二一三六

NHK学園「俳句のつどい」東海・北陸大会係
☎（〇四五）七二二二五

主催 NHK学園

後援 愛知県教育委員会・名古屋生涯教育委員会

協賛 NHK名古屋放送局・中日新聞社
三井生命保険相互会社

去年今年貫く棒のごときもの

虚子

日本人の晩年の俳境といえは「わび」「さび」の境地というのが常識である。ところが虚子の作品から見た老境とは、むしろこの常軌を覆したものであると思われる場合が少なくない。

掲句の「去年今年」は虚子七十七歳の作である。ここでは彼は長年月にわたる自らの不動の歩みを「棒のごときもの」と詠ったのであって、別に意外性や奇をねらったものでもなかった。それは老いて知る「時間」の強大さであり信念の不屈さであった。在るように生る生き方の出来ない現代人は、この句に対して均しく瞠目した。

虚子はあるとき「死後百年の名を楽しまんよりは、寧ろ生前一日を楽しむに如かずですね」と言ったとある（虚子俳話録）。思えばこの一言も虚子の老境を語るにふさわしい。

西欧の文豪は、死ぬまで長編ととり組んだ。虚子の老境も全力で作句した。《山国の蝶を荒しと思はずや》（七十二歳）。《爛々と晝の星見え菌生え》（七十四歳）。《手で推してどかと窪みぬ春の空》（七十八歳）。これらの句からしても、彼は日本型の作家というより、西欧型の文豪にふさわしいと云えよう。 藤崎 久を

椿艶これに対して老ひとり

虚子

真赤な椿、虚子の好きな山椿が大きな花を夥しくつけて、椿全体を包むように咲き満ちている。鎌倉虚子庵には沢山の椿が植えてあり、春には庭を独占するようになる。この庭を眺めていると、その花の世界に入りこんで、弱くなった足を忘れ、自由自在に心の欲するところに行ける幻想となる。客観描写であるが「対して」の措辞が老にありながら、虚子生来の艶の世界に椿と遊び、椿が、とり囲む女人群にも見えて来る。

昭和二十三年、七十二歳の作、《造化又赤を好むや赤椿》《小説に書く女より椿艶》が同時作で、この三句から小説、『椿子物語』が始まる。虚子の老の句と云えば《見栄も無く誇も無くて老の春》（昭25）のような六十句を越す「老の春」の句に現れている自然随順自在な句にふれるのが一法だが、見栄も無くの句にも同時作《去年今年貫く棒の如きもの》がある。それが虚子。

深見けん二

【虚子 晩年の

俳境に学ぶ】

風雅とは大きな言葉老の春

虚子

昭和三十三年十二月十四日新年の句としての作。虚子最後の新春を謳歌するおらかな作となった。ただ、ここへ来て改めて風雅という命題に到り着いたのが、私には不思議である。星野立子編『虚子一日一句』には、

《風雅といふ言葉を父は晩年、口に出していいはじめた。研究座談会といつて父を囲んで清崎敏郎、深見けん二、湯浅桃邑、藤松遊子、私が毎月集る。「次は風雅に就いての話しませう」といつたがそれは果たせず亡くなった。》とある。芭蕉の「風雅の誠」は虚子の思いでもあったろうが、最晩年に詠まれたこの句の背景には、これから展開される虚子自身の「風雅論」があったのかも知れぬ。

虚子の老の句は「老の杖」「老の春」のように、老の字が入って詠まれたものが多い。年代としては句集『六百五十句』、戦後に輩出するが、老は明るい修飾語として働く。これは虚子が晩年健康にも恵まれ仕合わせであったからであろう。だから虚子の老の句は、境遇の違うものには真似る訳にはゆかない。老も死もまさに人さまざまなのである。

後藤比奈夫

第八回国民文化祭いわた33
俳句作品募集要項

主

文化庁 岩手県教育委員会 花巻市 花巻市教育委員会

主

（社）俳人協会 現代俳句協会 （社）日本伝統俳句協会 岩手県俳句連盟 第八回国民文化祭岩手県実行委員会 第八回国民文化祭花巻市実行委員会

応募作品

一人二句一組で三組まで応募できます。（未発表作品）

応募料

一組につき一〇〇円（海外投稿者は無料）郵便振替を利用してください。振替口座 盛岡〇一三三〇八〇 加入者名 第八回国民文化祭岩手県実行委員会

応募方法

所定の応募用紙または四〇字詰原稿用紙を使用のこと。原稿用紙を使用する場合は右ページに作品、左ページに郵便番号、住所、氏名（姓号）を使用する場合は本名併記、年齢、性別、職業、電話番号を明記のこと。海外投稿者についても日本語表記に限る。郵便局で受け取った受領書の写しを添付のこと。

応募締め切り

平成五年六月三十日（※当日消印有効、ただし、海外投稿者は必着）

応募先

〒〇二〇 盛岡市内九十一 岩手県庁内郵便局留置（文芸大会）係

選考者

阿部昭月 安藤五百枝 石崎美秋 稲畑汀子 小川眞砂 二 小原啄葉 桂 信子 加藤憲一 金子兜太 澤本欣一 廣羽鈴行 田川飛雄子 千葉博子 津根元洲 藤崎久 古館實人 星野 椿 松澤 昭 宮藤 一郎 森田 時 山崎ひさ子

賞（予定）

文部大臣奨励賞 国民文化祭実行委員会会長賞 岩手県知事賞 第八回国民文化祭岩手県実行委員会会長賞 岩手県教育委員会会長賞 花巻市長賞 花巻市教育委員会会長賞 岩手県俳句連盟会長賞はか

発表

第八回国民文化祭文芸大会「俳句大会」及び「合同大会」会場で発表します。なお、入選作品は応募者全員に無料配布します。

会日

【俳句大会】平成五年十月十日（日）午前十時より

会日

【合同大会】平成五年十月十一日（月）午前十時より

会場

花巻温泉ホテル紅葉館 花巻市湯本一〇二五

会場

花巻温泉ホテル千秋閣 花巻市湯本一〇二五

会日

〇一九八二・七・二二



今生は病む生なりき鳥頭

波郷

石田波郷は五十六歳で死んだ。私は波郷より一廻り下の丑年だが、その私にはや六十八歳である。老いは波郷にはなくて私自身にあるといたい。五十六歳で逝った波郷に晩年こそあれ老いはないのだ、ともいいたい。では、その晩年だが、波郷の、といっても波郷が編んだのではない遺句集『酒中花以後』を、われわれは晩年の作品集として挙げることになるだろう。昭和四十三年から四十四年没までの作品が収録されているからだ。

掲句は四十四年秋の作。波郷には辞世がないので、この句などは辞世の作としてふさわしいような詠ともいえる。「今生は病む生」であつたという把握はあまりにもかなしく、そしてきびしい。

薄羽かげろふ翅も乱さず死せるかな

筆柿や面会謝絶いつまでも

遺書未だ寸伸ばしきて花八つ手

露か雨か十一月ははじまりぬ

これらの作も昭和四十四年の詠であつて、まぎれもなく波郷晩年の姿を示しているものといえよう。

星野麥丘人

今生は病む生なりき鳥頭

波郷

石田波郷は、昭和四十一年十一月九日に六度目の入院をしてから、家に帰ることなく、四十四年十一月二十一日生涯の幕を閉じられた。享年五十六歳。掲句は『酒中花以後』に所収の晩年の句である。

病涯をはっきりと肯定し、自らの魂を正面から見詰めている諦念のような眩きである。「鳥頭」がせつなくひびいてくる。波郷の句風は常に進展し、また大変な病態にあつても静謐な精神状態を保ち、命の尊さを詠い続けたことに驚嘆するばかりである。

波郷に「柿食ふや命あまき生きよの語」の句がある。「老い」とは、命をあますことなく生きることであり、生きている限り、刻々の生の貴重さを認識し、愛惜してゆくことである。

「俳諧は老後の楽也」とは、芭蕉の言葉。老いてこそ、いろいろな束縛から解放されて、自然へと眼を向け、誰のものでもない、自らの人生を精一杯詠うことである。老いは個性的であり、俳句こそ、老いを創造してゆくに適したものではない。老いの初心を大切に、老いの生命の証しを開いてゆきたいものである。

大澤ひろし

【波郷 晩年の

野分雲透きし虚空をわが覗きぬ

波郷

石田波郷は、昭和四十四年十一月二十一日、五十六歳で死んでいる。掲句はその前年の作。「わが覗きぬ」に無限の感慨と病床から空を見ている作者像がよく出ている」（『石田波郷集』註・村沢夏風）とあるが、波郷の作品にしてはかなり散文的な句といえる。

この句をもって直ちに波郷の「老い」の句とするには若干のためらいもあつたが、作品上の「老い」は必ずしも暦年齢の「老い」と一致するものではない。

「風景を詠はうが日常生活を詠はうがその根幹には作者の「生きる態度」がある。」というのが波郷の言葉であつたが、この「生きる態度」とは、生きていることを自分でいつも認識しつつ生きている……ということの意味する。今日生きている。明日は死ぬかも知れない。いや明日も生きている。この強烈な認識力に支配されるようになることが「老い」というものである。更に、「老いの句」とは、過去に充分に知覚されたものごとを、今の、眼前の景に少しばかりずらしながら重ね合わせることにによって見られる「薄々」としたいのちの風景」ということになるのであろうか。

今井杏太郎

人はみな旅せむ心鳥渡る

波郷

波郷は昭和四十四年、五十六歳で亡くなった。当時と今とは若干違ふとは思ふが、還暦に達しなかった年齢が老のうちに入るのかどうか、今ならあまりにも早死にという感じがするのではあるまいか。波郷が亡くなった時からそうであるが、私などは波郷に老を感じたことはない。波郷は病境涯にあつて没年を迎えたが老境涯にあつたわけではないのである。強いて言えば波郷の句から私どもが印象として受けたのは、晩年感とも言うべきものである。そういうものは「惜命」に次ぐ「春風」にすでに揺曳していたと言つてもよいかも知れない。更に言えばもっと早く、「惜命」に先行する「雨覆」にすでに兆していたと言つてもよいのである。波郷は出征中北支で得た宿病が再発し、もはや健康な将来を期待し得ず、「餘すところの命も多きを顧ひ得ない」と後記にしろし、序に「天数の限り知らるる夕まで……」という鬼貫の文の一節を附しているのである。老の句としての観点から見れば、この晩年感と病境涯によつて余儀なくされた日常性を深めた句境を挙げるべきであらう。掲句の澄明な味わいはそこから生れていると私は考える。

石田 勝彦



寒雁のつづらかな声地に落ちず

蛇笏

飯田蛇笏の忌日は昭和三十七年十月三日である。七十七歳の生涯であった。この作は、昭和三十三年、亡くなる四年前に作られている。収録の句集は、『椿花集』（ちんかしゅう）。因みに、この集は蛇笏の歿後に子息の龍太氏によって編集されたものであることを付記したい。最晩年の六年間の作四六二句を収める。おそらく、老境にある俳人の詩精神のくまぐまが見える集として、代表的な一書であると言っている。

さて、そんな晩年の風姿に合った一句として挙げたいのが、「寒雁」の作である。晴れわたった寒中の空を飛ぶ雁の「声」にじっと耳を澄ましている。作者と雁の声によって醸される、純粹に透明な世界である。肉体そのものによる把握と言ってもいい。「声」の質感を捉えた「つづらかな」の語は、他の誰が使っても類想に見えてしまうような重みを持つ。それより何より、下の句の「地に落ちず」は、この句の支柱。天上にあって自分の生命をうたいつづけるものへの憧れ。と同時に肉体の衰えを越えて、自己の生きざまの内部に踏み込んでいく意志の表出を読みとりたい。

廣瀬 直人

冬瀬のきけば相づくこだまかな

蛇笏

蛇笏句のうち、最も面白い作の一つとして、私はもう四十年來、〈秋鷗がゐるゐる陶のたまごかな〉を挙げ続けてきた。が昭和十一年、五十一歳のこの蛇笏作はいきなり老境の作と結びつけるのは無理だろう。もっとも明治の人蛇笏の場合、その老境は現代の人より十年は早く到来していたのではなかったろうか。

と考えると、昭和十六年五十六歳の上掲作や、〈なにもぬ雪水ふかくうごきけり〉〈奥嶺よりみづけむりして寒の溪〉〈へとり入るる柴の凍雪爐におちぬ〉などの作にはその沈思静観の姿勢の中に熟年から老境にいたる詩情の澄みとともに、その開眼がみられると云っていいだろう。続いて昭和二十一年六十一歳の作〈畏のへにたちどまりたる鶴かな〉にはその老境ゆえの慎重な用心深さを暗喩した余裕とユーモアが感じられる。一方同年作の〈ひややかに人住める地の起伏あり〉には戦争に挫折した人の人生内観の詠嘆をみる。自然にひたりその自然相を寂寥のうちに捉える蛇笏の老境句風は二十四年の〈雪山の冠りみだる風の星〉などの句となって高調していったのである。

石原 八束



【蛇笏 晩年の



俳境に学ぶ】

薔薇園一夫多妻の場をおもふ

蛇笏

蛇笏先生の最終句集『椿花集』に収められている昭和三十一年七十一歳の折の作。この句の六年後に逝去されているので、蛇笏俳句晩年の作となるだろう。バラの花園に入ると、いろいろどりの花が咲き乱れ、その香りがほのぼのと身をつつみ、初夏の日のひかりが新鮮にバラ園に躍動する。園のなかに居るのは、作者一人であつたのではあるまいか。それ故に、

一夫多妻という華やいだ言葉が思いうかんだ。この華やきの心こそ、文学を志す者が生涯持ち続ける精神の昂揚だ。俳人もそうであるが、芸術の徒たる者であるならば、老いを武器としてところを表現しようとするなどあるはずがないと思っている。むしろ、年齢をかさねることにより自由闊達な境地に入り、外見は老いて得られる枯淡の味にしても、その精神のどこかに老いを克服する艶治ながやきを見ることが多い。老いを意識して、老いを俳句に詠むことなどあろうはずがない。年齢を重ねることは、多くの体験を得ることであり、自ずからの俳句視野を広げていくことになる。わたくし自身、六十五歳となり、最初の所得税老人控除を受けることになって、そんな思いで俳句に接している。

福田甲子雄

第6回全国健康福祉祭京都大会
(ねりんピック'93京都)「俳句大会」のご案内

一、投句要領

「官製はがき」に未発表作品一人二句以内(当季雑詠)を楷書で記入し、住所・氏名(ふりがなを付けること)・生年月日・年齢・性別・電話番号・当日句会の出欠を明記して送付すること。

二、部門：長寿の部 七十七歳以上(大正六年四月一日以前に生まれた人)

一般の部 上記以外の人

三、投句料：無料

四、投句受付期間：平成五年四月一日(例)五月三十一日(当日消印有効)

五、投句先：〒600京都市上京区下立売通新町西入敷ノ内町京都府庁内

第6回全国健康福祉祭京都大会実行委員会

会事務局 俳句大会係

栗津松彩子、石倉啓輔、稲畑汀子、茨木和生、大槻右城、

梶山千鶴子、桂澤謙子、金子兜太、金久美智子、木田千女、

後藤比奈夫、堺井淳彦、藤橋純子、清水忠彦、関戸靖子、

竹村文一、辻田克巳、徳本映水、那須淳男、八村廣、浜明史、

杉慈生、前田正治、松澤昭、丸山海道、水島洋一、村澤夏風、

山内山彦、吉田春風、和田信昭

長寿特別賞、正賞、准賞、選考特選賞

当日行います。

四、費 用

一、期日：平成五年十月三日(印九時より)

二、会場：国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)

三、出句：一人二句以内(曜日)

四、参加費：無料

五、記念講演：武庫川女子大学教授、京都府・京都市文化財保護審議会委員、森谷勉久(京都と千二

百年の文化)

六、主 催 厚生省、京都府、京都市、町長寿社会開発センター

七、後 援 第6回全国健康福祉祭京都大会実行委員会

八、主 管 日本伝統俳句協会、現代俳句協会、俳人協会、関西俳誌連盟

九、問合せ先 第6回全国健康福祉祭京都大会実行委員会事務局

〒600京都市上京区下立売通新町西入敷ノ内町

京都府庁内

電話 〇七五 一四一 四三三七

一本の白髪おそろし冬の鵲

信子

昭和三十三年作、『晩春』所載。この度の編集部よりの要望は「まことの俳句作法は老いにあり」との趣旨でかけとのことである。しかしこれには私は賛成出来ない。若くして名句を作り早逝した人、年老いて若い頃の榮譽を頼りに情性で作っているひと、さまざまであり、老いにこそまことの俳句があるなどと断定するのは危険である。それでは老人ばかりの俳壇になってしまうのではないか。若い時は若い時の句うような句をつくり、老年になれば無理をせず老年の句をつくる。それでいいのではないか。ただ、私は今老年のさなかに居るのでこうした設問から逃げるわけにはゆかない。それで書く。私の老の自覚はこの句から始まる。四十三歳のときのこと。それとやはり四十歳の初め、本を読むとき目からやや離れて見ていたのを人から指摘されたとき。その頃は老はずと遠いものと思っていたので老という字をみても何ともなかったがこの頃は老という字はみるのも嫌である。まして老年などよむ気にならない。今健在である私より高齢の先輩の作家の優れた作品を唯、目を瞠る思いで眺めている。

桂 信子

天上も淋しからんに燕子花

六林男

最初に書いておく。私は「戦争と愛」を畢生のテーマにしている。掲句は、二十余年前、即ち一九七一年（昭和四十六）年の作。年齢で言えば五十余歳。この時代に私は自分の生について想いをいたしていた。このことは、死にかかわることにほかならない。

私は、戦中派に属する。戦中派とは、是非を別にして国家が興亡をかけて戦った時代に二十代で人生観・社会観・国家観にそれなりの形をつけた年齢層である。個人的には若くして戦場で地獄も煉獄も見てきた、と言えは不遜だろうか。このとき、私の生は末期にあった。それから二十余年を経て書いたのが掲句である。おなじ時期「薪能死を想うわが頃となり」がある。それからさらに二十余年経過したのが現在の私である。今、肉体的な衰えのなかで生（死）をさまよっているところである。ちょうど二十年周期説。

今日まで機会あることにつぶやくように言ってきたことがある。まじめだけでは文学は展げないが「戦争」についてもエロスとアガベにあいわたる「愛」についても今までとおなじように、まじめにかかわっていくつもりだ。

鈴木六林男

【現代の俳人は

どう老いを詠むか】

冬越すじやがいの遊蕩の父は死に

鬼房

「死ぬまで生まぐさく生きたい」と言ったのは、わがみちのくの歌人結城哀草だ。私はこの言葉を胆に銘じて今日に至っている。これは何も齢に逆って無理に異を立てているのではない。齢に応じた在り方で、楽しければ楽しい、痛ければ痛いと隠さず言うことであり、拙句「鈴木や老境もまた華にして」のように、一日一日を精いっぱい生きること、そのあかしが華なのだと思っている。けれども、どうやらこの正直がわざわいしてか、私の生き方はかなり無視され敬遠されているようだ。実生活と言語表現の在りようは違ひ、私なども、実生活を基にするとと言っても、それに甘えないために不誠実のかたまりみたい、表現のぎりぎりを書くのだが、それが殆ど一般に理解されない。強いて判ってもらいたいと思わないし、老境とか言って、口ざわりのよい常識的な句など作る気はない。私にとって「老い」とは、自然を畏れ、「いま生きていくことの確認」にはかならない。掲句もその一つ。父は二十九歳で死んだ。三児を残された母は健在だが、亡夫をいまでもあまりよく言わない。心が痛む。

佐藤 鬼房

雪折や老鬼貫が粥啜る

櫻桃子

平成四年、六十六歳の作。私は「老い」に拒否感があるので、老いの句はこれしかない。それも発表時には「貧鬼貫」と改めた。しかし「老い」に無関心であるわけではない。私は自分の感情感をそのまま自分のこととして詠まず、この句のように上島鬼貫（一六六一―一七三八）のことにしたり、風景なら老樹・老桜に仮託する。鬼貫の境涯に関心を持って調べていて岡本綺堂の鬼貫を題材にした戯曲を読んだとき、上掲句が浮かんできた。六十歳頃から「老い」を意識しはじめた。だが今では造化の摂理と達観して「そのとき少しもさわがず」の心境で、天然自然にゆだねて心うつくしく老いたいと願っている。

芭蕉は晩年、ことに書簡において「俳諧は老いの愉しみ」を繰返している。私はこれを芭蕉研究の重要な命題の一つと考えている。現代流にゲートボールや旅行と同一視しては困る。俗世間の些事に煩わされぬ悠悠自在の境地を理想としたのだ。しかし「夢は枯野をかけめぐる」まま挫折した。西行は「花の下にて」の歌のように理想を果たした。西行にあやかりたいと思う。

成瀬 櫻桃子

萩は実にそのあととこのことまでも

曹人

萩の花は初秋、花が散って小さな青い実を結ぶのは仲秋、そして根元から刈取る季節が晩秋。小石川植物園の萩は殆ど散って、背丈を越える宮城野萩のつべんに実が群がっていた。「うつろい」をしみじみと感じながら専ら池畔の写生に没頭していた。

昨年二月娘を喪い、七月妻を亡くしたとき私は七十二歳の申歳。突然の逆縁の死に茫然として涙も出なかった。連句に神祇・釈教・恋・無常があつて、その無常の句に手古摺るほど今までの私の身辺は平穩に過ぎた。

三島由紀夫が秘かに死を決意してから、「友情のおわり」「恋のおわり」など「おわり」の随筆を連載したことがあるが、私もこのとき人生のおわりから発想して、「今」に生きる——今を詠む——ことに転換した。これが老と思う。少しずつ緊張がほぐれて自在になつて行くような気がしている。老人のための点滴やペースメーカーなどの医学的延命策を一切断つて、自然な尊厳死が望ましい。男子の平均年齢の七十五、六歳になるとき、俳人が筆を折る時期を自ら決めたい。そして死後のことは一切触れようとは思わない。

古館 曹人

古稀の年生くるに先づは水温む

化石

終世療養の身である私もいつか古稀の齢を迎えていた。よくぞ生き得た生命と思う。死と向かい合った時代もある。今は一般社会の人と同じに天寿を全う出来るようになった。多くの人の力に支えられ、そして自然風土の中から授かったものもまた大きい。草津高原の冬は長く厳しい。老の身にも春の来るのが待たれる。氷雪が解け、水温む頃ともなれば、また生きられたかと思ふ。掲出の句はそんな思いの中で詠われたのであった。「老を生きたとは自然に帰ることでもあろう。自然随順の俳句こそ、老後に適った文芸であると思う。」と、句集『石と杖』のあとがきに記した。老いてゆくことは寂しいことである。だが寂しさとは別に、人生の深い味も出て来ようというもの。それを楽しみにして俳句の道を歩みたい。

おのが道おのが歩みて枯れにけり

老の意識を私が持ったのは、生涯の俳句の師である大野林火先生に永別、深い悲しみの中にそれを強くした。私の還暦の年であった。

村越 化石

【現代の俳人は

石上に坐しかげろふとなりゆくか

夏風

私はこれまで積極的に「老い」という言葉を使つて句を詠んだという記憶はない。しかし老いという言葉を使うか否かに関係なく、大正七年生れといえはこれは疑いもなく老いである。従つて私の俳句はすべて老いの所産ということになる。掲出の句にしても、やはり年齢随順、おのずから石上に老いを見出し、日常生活に密着し境涯に執するところから出発したもので、その出自からしても根本的には自己表出というところにつながっている。

従つて老いという意識も世間並みの年齢に従つて抱いてきたが、実際いうと今までに、老いたりという意識の底に溺れこんだことはない。私は先ごろ仲間たちの前で、人間年齢を加えれば身体機能はおのずから衰える。これは自然の理でやむを得ない。だが精神はむしろ経験を増して活発になる。俳句にしても内容豊富なものが生れる筈であると述べた。あせらず固陋頑迷にならず柔軟性をもって周囲に対応していけば、いよいよ俳句も面白くなつていくものと思うのである。

村沢 夏風

初鏡老いし仔細を映したる

美穂女

新春の諸式もだんだんに簡略になったとはいふものの、元日には、改まった心で一寸紋のついたものを着ることにしている。殊に仕立おろしの好きなものが着られる時は、よくぞおみなに、と大仰でなしにそう思う。手鏡を近づけてみて、一寸白髪がふえたかしら、などとも——。それも老いし仔細の一つである。いやでも皆齢をかさねていくが、せめて美しく老いたいものである。このところ弱めて足のため減量八キロを申し渡されていて、これが又なかなかむずかしい。

ところで私には、老いの句は苦手であまり作つてはいない。それよりも、旺盛な好奇心、それを大事にいつまでも俳句ぐらゐは瑞々しくありたいと思つてゐる。

気持よく若さに負けてゐて涼し 美穂女の境地である。

田畑美穂女



今日ありと思ふ余命の冬桜

苑子

先ず思ったのは、こういう内容の原稿依頼を私もと
うとう頂く歳になったか、ということ。と言ってべつ
にさしたる感慨があつたわけではなく、ごくしぜんに
受けとめて老いの字を使用した句を探したが見当たら
ず、掲句のように老いの感慨を詠んだ句になった。

性来、病弱だったので、昔から死はいつも身近に
添っていたが、老いを意識したのは六十歳を過ぎた頃
からで、その頃、急に世の中の一切の動きが精彩を帯
びて美しく見えはじめ、自然はもとより、人間生死の
様相なども、心の距離をある程度おいて眺めていると
際立って真相が見えてくるのに気付いた。

人間それぞれの生き方が自分も含めて走馬燈のよう
に面白く見えはじめたのもこの頃である。これからは
自分の生き方も俳句も変わるであらうと思つたが、な
ぜ老いの意識と俳句とが結び付いたのか。多分、女を
脱却してひとりの人間として自立しなければ本物の俳
句など書けっこないと思つたのであらう。変な論理だ
が、心のどこかで納得していた。

掲句は、冬桜のさみしい華やぎに目を留めて、また
とない余命の今日ただいまの生のめぐみが、こよなく
愉しくいとおしく思えた。

中村 苑子

まさかと思ふ老人の泳ぎ出す

登四郎

『長嘯』の中の一句。どこか温泉の大浴場での句。あ
きらかに自分より年上と思われる老人が、タオルを頭
に載せて湯の中に幸せそうに身を沈めていた。しかし
それは一寸の間で、老人はついに身を伸ばすと沖に
向って泳ぎ出した。沖というと海のようにだが温泉プー
ルの遠方で、湯に煙っているので明らかに沖に見え
た。私はその老人のエネルギーに唖然としていた。

病身な私は老を意識するのはかなり早かった。そし
て老いというものゝ俳句の素材として合っているの
で、かなり若い時から老いを詠んでいた。しかし七十
近くなり本当の老が襲って来たとき、ふしぎと肉体の
老の中から心の若さが沸々と湧き出してくるのを感じ
た。俳句の形式をとことんまで追いつめて行くのは心
のエネルギーを多分に必要とする、それが湧いてくる
間は、肉体は老いても怖れることはない確信した。
俳句はどこまで行っても行き尽くることのない文芸で
あるが、そのことも私に希望をもたせている原因でも
ある。

能村登四郎

【現代の俳人は

どう老いを詠むか】

青簾老懶のわれ隠すべし

梅子

この句は還暦一、二年前の作。今から考えてみると
〈老い〉ということ、そんなに切実に感じていたの
ではなく、第三者から見れば年齢相応に見えたにちが
いないが、自分ではそう深刻に思っていたわけではな
い。むしろ〈老い〉という境地を美化して考えたかつ
たように思う。自分にそのような日が訪れた時には、
古簾などではなく、さっぱりした青簾を垂らして〈老
い〉の姿など見すまじく、かくありたいという心情を
詠んだものと思う。まるで物語か舞台のように演出し
た次第である。この句以来、私は〈老い〉という言葉
を使って作句をしていないように思う。

青畝先生は、大らかに〈老いの春〉などの句を作っ
ておられるが、〈老い〉という言葉を使わない私が、実
は〈老い〉ということに拘泥している証拠かも知れぬ。
生きてゆく刹那刹那を〈老い〉と結びつけて、考え
たくはなく、自由にその時の感情を詠みたいものと
思っている。はたして何時まで続くか判らないけれど。
今日が去れば新しい今日が来る。すべて今日であ
る。今日を大切に、少しはましな今日の句が作りた
い。

下村 梅子

花火見る母も老いたり我も老い

敏郎

私は結婚して以来、船橋に住んでいるのだが、母は
父を亡くしてから、二子玉川の実家に、ひとり暮ら
している。私も若くて、子供も小さかった時分には、
年に一度の玉川堤の花火を見に行くのを楽しみにして
いた。玉川の家の上階は、花火を見るのには、かっこ
うな場所だったのである。父母も、久しぶりに孫達が
やって来て、はしゃぎ廻るのを、楽しみに眺めてい
た。が、子供達が成長して、花火見物の興味を失って
しまったし、父も亡くなってしまった頃、所要のた
め、花火大会の日に、玉川の家に一泊したことがあつ
た。そして、母と二人で、花火を見ていた折に、ふつ
と母も老いたが、私自身も老いてしまったという感慨
を催した。それはお互いに、過ぎ去ってしまったこと
を思い出して、語りあったせいだったのだらう。六十
歳になったばかりの頃だったと思う。私が、老という
ことを詠んだのは、これが始まりである。そして、そ
の後もない。最近では、物忘れがひどくなるし、体力
の衰えを覚えることが屢々であるけれど、それを詠ん
だ句は、まだ一句もない。やがては、そんな句を詠む
気持になるかも知れない。

清崎 敏郎

